

広報 [災害統計]

車両系建設機械及び高所作業車の労働災害による死亡者数の推移と令和4年における発生状況

建設荷役車両安全技術協会 本部

平成20年からの車両系建設機械及び高所作業車（以下車両系建設機械等）の労働災害による死亡者数の推移がグラフ1の折れ線グラフ、また機械の種類別の内訳が棒グラフである。

令和4年の死亡者数は50名であり、平成20年の88名と比べ、38名の減（43%減）であった。

機械の種類別にみると、とくに「整地・運搬・積込み用機械」の減少が顕著で、この機種で平成20年：20名→令和4年：8名に減少している。

令和4年に発生した車両系建設機械等の労働災害による死亡者数は、前年の46名より4名増（9%増）の50名となり増加に転じた。

機械の種類別・業種別の死亡者数は表1・グラフ2のとおりである。

機械の種類別では、「掘削用機械」に起因するものが、前年の16名から26名（63%増）となった。例年「掘削用機械」は機種別1位を占めるが、令和4年はとくに比率が高い。「整地・運搬・積込み用機械」は前年より減少した。

「高所作業車」は8名で、ここ数年微増傾

向である。

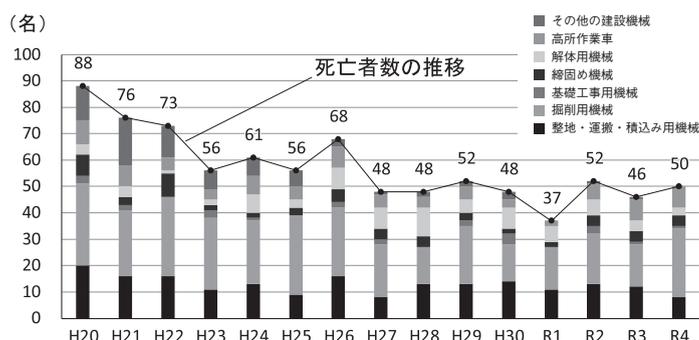
業種別では、「建設業」の40名が全体の80%を占めており、例年同様となった。内訳（「土木工事業」、「建築工事業」、「その他の建設業」）は前年とあまり変わらない。「運輸交通業/貨物取扱業」では前年0より4名に増加した。

次に、車両系建設機械等の種類別・事故の型別に分類したものが表2・グラフ3である。

事故の型では、「墜落・転落」が15名、「はさまれ・巻き込まれ」が14名、「激突され」が12名でこの上位3項目で全体の82%を占めている。これはここ数年の傾向である。

災害事例をみると、件数の多い「掘削用機械」中、ドラグ・ショベルのトラック荷台への積み込み（または積み下ろし）作業中や積み込み後の作業に係るものが4件発生している。また、「高所作業車」の災害事例8件中、4件がアウトリガー格納時の逸走によるもので、傾斜地に駐停車する場合の処置やアウトリガー格納手順の再確認が望まれる。

[資料提供：厚生労働省]



グラフ1

車両系建設機械・高所作業車の労働災害による死亡者数の推移

表1 車両系建設機械・高所作業車の種類別・業種別死亡災害発生状況（令和4年）

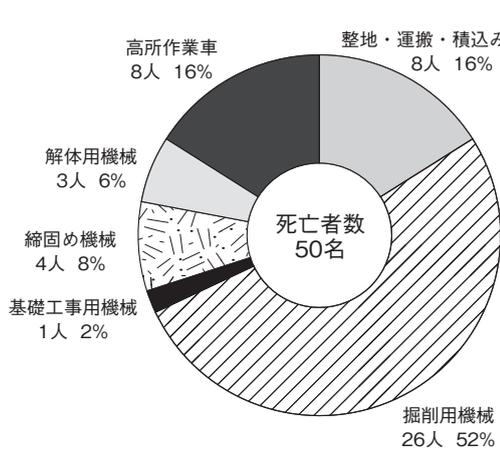
（単位：名）

業種 機械の種類	製造業	鉱業	建設業			運輸交通業/ 貨物取扱業	農林業/ 畜産業・ 水産業	商業	その他	計
			土木工事業	建築工事業	その他の 建設業					
整地・運搬・積込み用 機械	1	0	1	2	1	2	0	1	0	8
掘削用機械	0	1	15	5	1	2	1	0	1	26
基礎工用機械	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
締固め機械	0	0	2	1	0	0	0	0	1	4
解体用機械	0	0	1	1	1	0	0	0	0	3
高所作業車	0	0	4	2	2	0	0	0	0	8
その他の建設用機械	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1	1	24	11	5	4	1	1	2	50

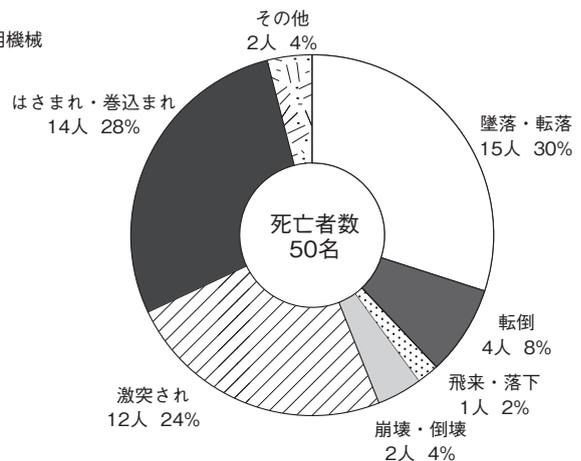
表2 車両系建設機械・高所作業車の種類別・事故の型別死亡災害発生状況（令和4年）

（単位：名）

事故の型 機械の種類	墜落・転落	転倒	激突	飛来・落下	崩壊・倒壊	激突され	はさまれ・ 巻込まれ	その他	計
掘削用機械	8	4	0	1	0	7	6	0	26
基礎工用機械	0	0	0	0	1	0	0	0	1
締固め機械	2	0	0	0	0	0	2	0	4
解体用機械	1	0	0	0	1	1	0	0	3
高所作業車	1	0	0	0	0	2	4	1	8
その他の建設機械	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	15	4	0	1	2	12	14	2	50



グラフ2 機械の種類別



グラフ3 事故の型別